

(別紙)

TVシンポジウム「令和の日本型教育 なにを目指す？」から

- ・学習者中心主義
- ・生徒自身が教科ごとに学びを設定するアサインメント。
テーマはおよそ250。
- ・教科の中のどの単元からやり始めてもかまわない。生徒一人ひとり違う。
- ・テーマによって一人で学んだり、グループで学んだり。
- ・自分で考えて実験するので、あるチームはこういうやり方、他は別のやり方。
- ・自分で調べて答えを出す。難しいことは友だちと一緒にやる。
- ・やらせた時と自分で選んでやった時では、モチベーション、スタートが全然違う。
- ・意地でもなんとかしてやろうみたいな。調べたり、教科書を読んだり、色々しながら粘ろうとします。最初からわかりませんとは、ほとんど言わない。
- ・生徒全員が自らの課題を探求
- ・1年生から3年生が共同してテーマを掘り下げていく。
- ・自分の感情を表現する道具というテーマに、東京大学大学院生と一緒に取り組む。
- ・自分で自分の学びに責任を持つ。自分の学びの失敗は自分で責任を持つ。ですので自己肯定感が高くなっていく。
トライアルアンドエラーをひたすら続けることが学びの中心であることを生徒たちがよく知っている。
- ・一年生の時は非常に大変だった。それが学年が重なるにしたがって、先輩が良い教師役になっている。
- ・自己肯定感が高まる中で誰かに褒められる。おだてられるんじ

やなくて。

- ・色々なところで色々な探求の学びをしていますので、その中ですごく自分にフィットした、これ面白いと思った瞬間にすごく深く入っていく瞬間っていうのがあるんですね。その時にガーンと伸びているなっていうふうに感じます。
- ・中学に入学してくる子どもは、全く真逆で勉強は受身で消極的で、親御さんは転ばぬ先の杖を5本も6本も与えちゃうので、ほとんど当事者意識がない。
- ・評価の方法もすごく様々
- ・期末テストといった定期考査はありません。
- ・正しい答えかどうかだけが評価基準ではないということを生徒たちもわかっていますので、時間をかけて実験をずっとすることもできるんです。
- ・中学3年生の社会科総合の授業。卒業論文作成に向け、自分が設定したテーマと研究の進め方を発表します。他の生徒からときには厳しい意見が投げかけられます。
- ・ふり返りと気づきを繰り返しながら論文の骨格を具体化していきます。そして400字詰め原稿用紙30枚から50枚ほどの卒業論文にまとめます。
- ・すごく生き生きと学び始めて、授業が終わった後に生徒が残って、今日やっていた問題について話していたり、黒板の前に寄って来て、先生ここどうなっているのみたいなことを。
- ・キーワードはTeach Less, Learn More。
- ・よく質問するようになりました。休みの日にもよく質問してきます。
- ・授業が楽しいとか、自分から進んでやることで自信が持てたりとか、生徒が生き生きしている様子が授業中多く見られるよう

になってきた。

- ・先生方がもっと手抜きをしたらいいのかなと。手抜きっていうことは良いことなんだ、楽するってことは良いことなんだって思ったらいいのかなと。
- ・大学というのは今、基本的に偏差値で選ばれているわけです。その時代がいつまで続くのか。今、日本は非常に困難な状況に直面していて、大きく変わらざるをえない。

(このシンポジウムのパネラーの方がた)

中田大成さん(海城中学高等学校 校長特別補佐・ICT教育室室長)

柳沢幸雄さん(北鎌倉女子学園学園長 前開成中学校高等学校長)

布村奈緒子さん(ドルトン東京学園中等部・高等部副校長)

西村圭一さん(東京学芸大学大学院 教育学研究科教授・学長補佐)

宮内孝久さん(神田外語大学学長 元三菱商事代表取締役副社長)

善本久子さん(鎌倉女子大学教授 元東京都公立中高一貫教育校長会長)

NH K T Vシンポジウム「令和の日本型教育 なにを目指す？」
(002CH 22.10.29. 14:00)